

論争のすすめ

—富士の高さを測ったのは誰か—

堀内 剛 二

降りかかる火の粉は払わねばならぬ、という言葉は例の憲法9条論議でよく聞いたものだが、筆者は元来論争なるものを認めない。だがしかし、昨今は個人的意見というものの影がうすくなった。つまり、やむなく巻き込まれる仕儀となった以上、いっそ論争をすすめるにしかずである。

百数十年以前江戸は文政年間の「富士山の高さ」のことを約十年前に書いた拙文（天気1巻2号）について、文章は常にそれ自体で完結していると考える筆者が、再び筆をとるに際しては、これだけの決意を必要とした。「天気」15巻4号所載の「鯉沼氏の“日本の気象観測の始まり”について」（根本順吉）と「根本氏へのお答え」（鯉沼寛一）と題する短文を見たとき、一瞬筆者は、死者の甦えるに似た一種困惑に近い奇異な印象をうけた。拙文の主題は、その末段の「富士山の高さを測るということのうちにもまた歴史が流れているのである」という一行につき、史料若干を引用した考証的手法による小品文であった。それはそれとして、セルフコンシステントであることを筆者はいまも信じているのである。一体、かねてより筆者の良友である管の根本、鯉沼の両氏は、果して拙文を熟読されたのであろうか。

「富士山の高さを最初に測ったのはまぎれもない日本人で、二宮敬作という蘭方外科医だったらしい、らしいというのは、実はまだよく調べてないからで、調べた範囲では、彼がその高さを測ったことだけは確かに分っている」（根本氏引用の拙文の一部）

この最後のセンテンスの「確」という活字が横ざまに組まれていて、根本氏の疑惑を表徴するかの如くであるが、氏は「まだよく調べてない」ことがなぜ「まぎれもない」のか「確かに分っている」といわれるが「調べた範囲」は一体何なのか、という具合である。だが、読者よ。上記引用の数行は、疑問の余地のない程に明々白々、かつは極めて率直な表現ではないか。二宮敬作が富士の高さを測ったことは分っているが、それが最初かどうかはまだ調べていない。頭脳明哲の根本氏が、安心し

て引用されなくとも、理解のできぬ文章であるとは到底思えないのである。

さて次に、もっと驚ろくべきことがある。

「蘭方外科医二宮敬作は文政9年2月に師のシーボルトの江戸参府に随行し、途中箱根山で気圧計を用いてその高さを測定した」と述べておられますが、小生の調べた限りでは、これは全く想像で、何らの証拠もみつきりません”

これは根本氏コメントよりの数行で、前半角括弧は、鯉沼氏の報文に引用された筆者の小品文中の一節であるらしく、従って根本氏は鯉沼氏の報文を通じて筆者の文章を攻撃しておられるという至極複雑なプロセスになっている。読者はその錯綜ぶりに注意されたい。ところで、その驚ろくべきこととはこの三者の関係ではなく、実に、鯉沼氏の引用された上記角括弧の文章が、拙文の何処にも見当たらないということなのである。筆者は、シーボルトの箱根越えで、二宮が高度測定をしたとは書いていない。ただ、二宮が高度測定の手伝いをした可能性があることを示唆しただけである。従って、鯉沼氏の誤った引用で根本氏が筆者に「この点は特に御教示を得たい」と開き直って申越された次第である。つまり、根本氏自身が調べて証拠の見つからないものは「全く想像」であると断定される程の氏は何と鯉沼氏の引用が拙文のまゝであると至極簡単に仮定して、これを原文につき調べられなかったのである。鯉沼氏は「私も堀内の記述は少し明確を欠くと思ったので（略）その高さを測定したという」というように断定を避けたつもりでした」と記された。おゝ、何とも奇想な三者三様のカレイドスコープであることよ。閑暇ある読者は出来うれば、十年前の拙文を参照されたい。そうすれば、筆者の不思議なというよりコッケイな立場を了解されるであろう。

だがしかし、どうも、これだけでひき下がる訳にもゆきかねるようである。十年前の拙文は、それとして存在を続けるであろうが、蛇足くらいここでつけ加えるのが適当と考えた。

カピタン江戸参府に同行したシーボルトは、この旅行のために観測隊ともいえるものを編成し、そのため理学関係助手としてジャバ病院薬剤師 Heinrich Büger と画家 de Villeneuve をよびよせ、なお日本人研究補助数名が選ばれてなかに高良斉、二宮敬作があった。文政の年旧3月1日11時近く、一足さきのビュルヘルは箱根峠の高さを測るためトリチュリ管に水銀を充す準備をし、おくれで箱根の関へ12時少し前についたシーボルトは太陽高度測定をした。それから、多分、シーボルトが水銀バロメーターによる高度測定を、恐らく二宮敬作などと共に数回行い、一方ビュルヘルは沸点降下法で高度を求め、降下3度、フンボルトの換算で約3,000尺の結果を得た。実際観測時での仕事の分担細部は、さして重要ではなく、これらの観測の計画、立案、指導者はシーボルトであり、シーボルトが観測したとって何らさし障りはないのである。

二宮敬作がシーボルトの指示によって富士山に観測登頂を決行したのは、文政11年(1828)旧5月であるが、根本氏の要求される「証拠」は、決定的ものは存在しない。その理由は、シーボルトも二宮も、否シーボルト事件関係者はすべて累を他に及ぼすことを恐れ「拒否権」を行使し、これを公にしなかったからである。しかし、二宮敬作がこの事件に連座して「江戸構、長崎払

の判決をうけた理由に、温泉岳の高度を水銀バロメーターで測ったことが挙げられている。その値は4287英尺。この温泉岳高度測定が、もし江戸参府以前(シーボルトはそれまでに2年半を長崎に過した)ならば、箱根越えでは当然高度測定の手伝をした筈であり、参府以後であっても、少くもその時水銀バロによる高度測定法の説明を聞いたと推定される。というのは、この度の参府に際しシーボルトは高橋景保(江戸司天台主席)にも水銀バロメーターによる高度測定を伝授し、これによって、鳥海山、白山、御岳などを測定する示唆を与えた模様であるから。こうして、日本での水銀バロメーターによる高度測定は、シーボルト、二宮敬作にはじまるといって、まづ、間違いはあるまい。因みに従来の量地家による高度測定は、いわゆる triangulation 法に類するもので、鳥海、温泉、金峯、高館、月山、羽黒などが文化年間までに測られていた様で、出羽の田中万春などに負うところが多しという。

さて、筆者はもうこれ以上この問題について読者を引きとめようとは思わないが、どうであろう。気象学界にもう少し論争があつていいのではあるまいか。カフカのともいえる何とも奇妙な、余儀ない論争にまきこまれて見て、これで、もし筆者自身に関係がなければ、ふとそう考えたのであつた。(1968年8月)

夏期大学講座「新しい気象学」(第2回)経過報告

第2回の夏期大学講座は予定通り7月22~27日に気象庁大講堂で開催された。出席は昨年同様、90名近くで、高校の教師の方が多かった。講義はおおむね予定通り行われ、また24日の午後には気象研究所の、27日の午前には気象庁の見学が行なわれた。出席者にアンケートを求めたところ、約1/3の30名の方々から回答が得られた。今後の参考のため、その結果を要約すると次のようである。

1. もっとも興味を持たれた講義題目

高層天気図(13)、大気大循環(10)、メソ気象(9)、天気予報(8)、台風(4)(カッコ内は回答数)

2. 今後要望される講義題目

気候学、数値予報、雲物理学、成層圏、古気候、大気汚染、天気予報、長期予報、世界各地の季節変化、気象統計学、微・小気候学、都市気候、雷雨現象、気象衛星、気象と病気・公害、空中電気・地磁気、身近かな気象、理論気象、気象測器、台風予報はなぜ外れるか、大循環・高層天気図は時間をかけて詳細に。

3. 講義の形式、連絡等についての要望

涼しい部屋で講義をききたい。マイクの不備。スライドは適量に、テキストはもっと事前に配布すること。参考文献をのせること。参加者の名簿をつくれ。見学は是非毎回やってほしい。討論の場を。地方開催も考えてほしい。映画フィルムの借用について便宜を計られたい。数式を使った説明を。程度を高く。一般向・専門向を半々に。教材に生かせる実験もしくはこれについての解説。来年度は講師を全面的にかえてほしい。

4. その他

開講の期間については7月下旬を希望する者がもっとも多かった(22名)。その次は8月下旬を要望された人が4人あった。

5. 講義テキストについて

事務局にはなお講義テキストの残部がありますので、希望者は学会事務局まで必要部数をお申込み下さい。定価1部400円(送料別)

(根本順吉)